

学生による討論会企画の成果と課題 ～「教員による試験問題の使いまわし」に関する議論から～

東 穂香¹⁾、峯松明日香²⁾、森 稼頭人³⁾、木本実佑³⁾、松尾優輝²⁾、桐畑尚真²⁾、
近藤 薫⁴⁾、長町裕征⁴⁾、塩川奈々美⁵⁾、吉田 博⁵⁾

- 1) 徳島大学総合科学部 2) 徳島大学理工学部 3) 徳島大学生物資源産業学部
4) 徳島大学附属図書館 5) 徳島大学高等教育研究センター

1. はじめに

徳島大学サポート系サークル「学びサポート企画部」は、「大学生の日々の学習における躓きに対して、学習支援を行うとともに、学習をするために必要な基本知識・技能を習得する機会を創ることで、大学生の学習スタイルの向上、改善を行う」という理念のもと、学生8名と図書館職員2名、教員2名で活動している(2024年11月現在)。

主な活動は、学習相談 Study Support Space (以下、SSS) の企画、運営であり、徳島大学生の学習に関する相談に対応することに加えて、相談に対応する教員や大学院生にとっても有意義な取組であることが示されている¹⁾。また、学びサポート企画部は、学生と教職員による交流を通じた学びの場を創造するイベントを図書館等で企画・開催しており²⁾、2024年度は、学生同士で討論を行う「討論会をしよう」を企画、実施した。

そこで、本発表は、2024年度に実施した「討論会」について紹介するとともに、参加者アンケート及び討論会の審査員として協力していただいた教員へのインタビュー結果を分析し、本企画の成果と課題について報告する。

2. 討論会をしよう

「討論会をしよう (以下、討論会)」は、学生同士の意見交換を通して学部、学年を超えて交流する場を作るとともに、課題探求能力について知るきっかけにすることを目的としている。「教員が定期テストを使いまわすことの是非」をテーマとし、2024年6月27日に開催し、常三島地区の3学部から1、2年生の6名が参加した。参加者は、

テーマについて賛成か反対かのいずれかの立場に分かれ、各グループの主張、質疑応答を行い、グループ内で相談し、再度双方の主張を行う。これらのやり取りを3名の審査員がそれぞれ判断し、良かったと思うグループを1つ挙げるものである。審査員は、SSSのアドバイザーでもある大学教員に依頼した。図1は当日の様子である。

3. 参加者アンケート

討論会では、終了後に参加者アンケートを実施し6名から回答を得た。図2は、5件法による設問の回答結果を示したものである。

「⑥本企画は満足できましたか」という設問では、すべての参加者が「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」と回答しており、肯定的な評価が得られた。また「③学年・学科を超えて交流することができましたか」では、5名が肯定的な回答をしていることから、交流の場としても有効的であったと考える。一方で「②課題探求能力を知るきっかけになりましたか」では、半数が「どちらともいえない」と回答しており、本企画のもう一つの目的である課題探求能力を知るきっかけを作る点では課題が残る結果となった。

自由記述からは、「今まで深く掘り下げたこと



図1 討論会の様子

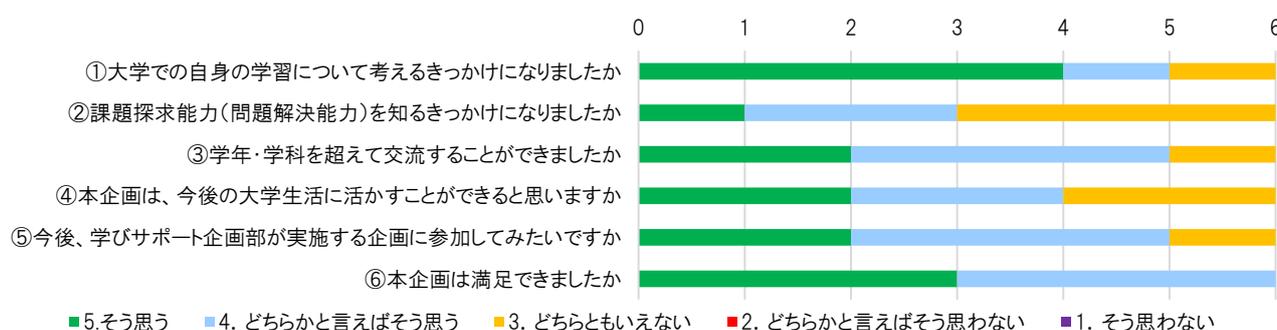


図2 参加者アンケートの結果 (n=6)

の無い議題だったので新たな視点を持つきっかけとなった」という意見が挙げられており、「①大学での自身の学習について考えるきっかけになりましたか」とう設問で肯定的な回答が5名であることを踏まえると、討論会は学生自身の学習への取組を考えるきっかけになったことが窺える。また、「自分の主張をはっきりさせて突き通したい」や「相手の質疑に対して自分達の意見をまとめて言わないといけないところが難しかった」という意見が挙げられており、討論が新たな経験や気づきにつながったことが分かる。一方で、「テーマの定義を固めてほしい」や「もっと人を集めてほしい」など、テーマ設定や参加者数に関する改善点も指摘された。

4. 審査員へのインタビュー

討論会で審査員を務めてくださった3名の教員に、教員から見た本企画の意義、企画の改善点等についてインタビュー形式で意見を伺った。

まず、3名に共通していたのが「このような体験は学生の成長につながる」や「体験したことが記憶に残る」という意見である。これらの意見からは、本企画を通して、異なる意見を持つ学生がお互いに主張し議論することで、新たな経験や気づきとなり、さらなる成長につながる可能性があると考えられる。また、2名から「学生が試験に関して意見を出し、吟味することは大切であり、よい議論ができていた」というテーマ設定に対する意見もあり、学生が大学での学習について考える機会となったことが考えられる。一方で、「テーマが固かった」という意見もあり、学生の学びにつながり、また学生にとって親しみのあるテーマを

設定する必要もあることが分かった。また、3名から、「人数が少ない」、「学生がおとなしく、議論を楽しむ心構えがある方がいい」のように、議論が活発に行えていないという意見があった。広報力の課題や参加者が議論しやすくするための工夫も必要であることが分かった。

5. まとめ

本企画では、学部、学年を超えた交流が実現し、討論を通して、新たな経験や気づき、学生自身の学習の在り方について考えるきっかけにもつながることが分かった。しかしながら、本企画のもう一つの目的である、課題探求能力を知るきっかけを作ることは、不十分な点があった。また、参加者が少ないという点も課題であった。

今後は、企画終了時に実施している参加者アンケートの結果を参考にして、学生が関心を持つテーマの中から、学びにつながり、かつ学生にとって親しみのあるテーマを取り扱うなどの工夫が必要である。また、広報について工夫することに加え、学生が話しやすい雰囲気づくりを行うために音楽を流すなど、リラックスして討論を行うことができる環境づくりも大切である。

参考文献

- 1) 仲村真樹、吉原 祥、桐畑尚真、中島由衣、佐藤孝之、國見裕美、塩川奈々美、吉田 博 (2023) 「徳島大学における学習支援 Study Support Space の存在意義」、第18回大学教育カンファレンス in 徳島発表抄録集、16-17。
- 2) 峯松明日香、森 稼頭人、東 穂香、藤村沙樹、岡村瞭花、桐畑尚真、吉原 祥、國見裕美、長町裕征、塩川奈々美、吉田 博 (2023) 「学生生活をテーマとした交流型学生企画の成果と課題」、第19回大学教育カンファレンス in 徳島発表抄録集、26-27。